
他人は自身を映す鏡。

きゅうり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

他人は自身を映す鏡。

【Nコード】

N7534X

【作者名】

きゅうり

【あらすじ】

酒宴に水を差し、杯には涙を差す。ほんのちよつとの誇りを添えて。

（前書き）

どうも、自己投影の落書きです。

話としては面白がないかもしれないけれど、
メッセージ性という点では、自分が書いたものの中では一番強いのではないかと。

駄文ですが、読んで頂ければ幸い。

煌びやかな銘酒も、絢爛豪華な肴も無いけれど、旧知の友人と呑むということはそれだけで大いに楽しい。よろしい。

そんなに呑んではダメですよ、いつか誰かに言われたような言葉が頭の中で反芻されるけれども、一献、一献、また一献と、際限なく酒がすすんでしまうのが人の性。まるでその杯に喜びそのものが注がれているかのように、僕は滾々と空の酒瓶を増やし続けた。

日常のしがらみという名の手錠や足枷がアルコールの力で少しづつ弛緩して、やがて手足から抜け落ちて体が軽みを増すのがわかる。理性、意地、もしくは世間体といった類の桎梏から逃れた僕は、勢い余って、ついつい、やがては心の底根に沈む本心のようなものを吐露してしまう。

「僕には本当に何も無いんだ。まるで空洞だ」

おいおい、と言った具合に友人は制止しようとするが、手品で用いられる万国旗のように、僕の口から出てくる言葉は止まりどころを知らない。

「僕は大いに馬鹿者だ。その証拠に、折角こんなに楽しい酒宴を、自らの手でぶち壊そうとしている現状がそうだ。けれども、言わないではおれないのだ。僕は本当に馬鹿だ」

「そんなことを言うもんじゃあない。お前はよく頑張っているじゃないか」

「それじゃあダメなんだ。他人からなだめられても、励まされても認められても。僕が僕自身を認めて上げることが出来なければ、何の意味もないんだ。少なくとも僕は、そういう考え方しか出来ないのだ。やはり何度、めくるめく脳を動かせても、僕には何も無いのだ」

友人は呆れたか、はたまた相手するのに疲れたのか、もはや口を開かない。彼の目は僕の言葉を真摯に受け止めようとしている、と

僕は都合良く勝手に推察したのだが、例えそうであっても、そういった彼の優しさに付け込むようにする自身の浅ましさが、やはり僕は気に食わなかった。

「どうだ、こんなこといつて呆れたか。申し訳ないとは思うけれど、僕はやはりそういう人間なのだから、いい加減、僕の周りに居る人間は、僕に愛想をつかすべきなのだ」

並々と注がれた杯に水滴が落ちて、その揺らぎは器の外に飛び出し、机を濡らした。知らぬ間に僕は涙を流していたようだった。

「ああ情けない。本当に僕は、周りの人間に恵まれていると思う。僕のような塵芥にも勝らぬ、劣情の塊のような人間に、よくぞまあここまで付き合ってくれていると思う。僕は、それだけは誇ることが出来る。自身に関して誇ることはできないけれど、それだけははっきりと言えるぞ、うん」

しばしの沈黙が場を支配した。

やがて彼は、ゆっくりと口を開いた。

「他人は自分を映す鏡、という言葉があるけれど、俺はそれは概ね正しいと思う」

僕は要領を得なかったので、彼の次の言葉を待った。

「お前は、自分に誇れるものは何も無いという。何一つ無いという。けれど、自分の周りに居てくれる人間は、誇れるんだな」

「ああ、自身の惨憺たる空っぽ具合と、周りの人間に対する誉れならば、幾らでも言葉を紡いで、何なら夜を明かして見せようか」

彼は、僕の皮肉ぶつた自己嫌悪の部分は聞かなかったようにして、さらに言葉を続けた。

「先も言ったが、他人は自分を映す鏡なんだ。悪人の周りには悪人しか集まらぬし、自分が善人ならきつと周りにも善人が集まってくる。いいか、お前。誇る人間がお前の周りに居てくれるというならば、それはお前自身を誇っていいんだ。誇りうる、いや、誇るべきなのだ」

力強く言葉を吐き切った彼は、涙の溜まった僕の酒盃を引っつか

んで、グイツと一挙動で飲み干した。

「なるほど、塩味が利いていて良い肴だ。熟れた野菜がなくとも、美味しい魚がなくとも、お前の涙は肴になる。お前は肴になる。お前と呑んでおると、それだけで酒が美味しいのだ。いいか、俺のことを誇りに思ってくれるのなら、そんな俺と酒を酌み交わす、お前自身も誇れ」

そういつて彼は、僕から奪った酒盃を静かに僕の眼前に戻した。

何も言うべき言葉が見つからなかった。

ただただ、空の酒盃に、涙を注ぐだけだった。

彼の言うことを鵜呑みにするわけではなかったし、他人は自分を映す鏡なんて言葉も眉唾ではあった。

けれども、僕の誇るべき友人が僕を誇り得ると言ってくれたこと、それが僕の小さな誇りとなったことには、否定屋の僕もうなずくよりなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7534x/>

他人は自身を映す鏡。

2011年10月20日03時03分発行